

日本における『魔の山』受容

—村上春樹『ノルウェイの森』, 宮崎駿『風立ちぬ』, 石川慶『Arc アーク』—¹⁾

及川晃希

1. はじめに

トーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955) の作品は、日本の作家達にもよく読まれ、影響を与えてきた。

三島由紀夫, 北杜夫, 辻邦生, 吉行淳之介, 大江健三郎, 大西巨人, 平野啓一郎などを、マン文学から影響を受けた作家として挙げるができる。²⁾

マンの代表作の1つである『魔の山』(Der Zauberberg, 1924)からの影響が見られる日本文学の作品として、村上春樹の『ノルウェイの森』(1987年)がある。また、近年の映画作品である、宮崎駿の『風立ちぬ』(2013年)、石川慶の『Arc アーク』(2021年)も、『魔の山』の影響が見られる作品である。

本論文では、この3つの作品における『魔の山』からの影響について検討する。

2. 村上春樹『ノルウェイの森』における『魔の山』

村上春樹は、ドイツ文学の作家ではカフカの影響が見られる作家であり、カフカやカフカ作品をモチーフとした『海辺のカフカ』(2002年)、『恋するザムザ』(2013年)という小説も書いている。³⁾

カフカについてほど目立つ形ではないが、下記のように、村上はエッセイでマンの『トニオ・クレーゲル』(Tonio Kröger, 1903)に言及している。

オブライエンを読んでしまうと読むものがなくなったので、近所の古本屋さんに行ってあれこれ悩んだ末に(旅行中に持参した本が尽き

たときの悩みは深いですね), 1ドルでトーマス・マンの短編集を買って、その中の『トニオ・クレーゲル』を読むことにした。『トニオ・クレーゲル』なんてたしか中学校のときに読んだきりで、筋もろくに覚えていない。どうしてそんな古くさいものを読もうと思ったかという、こういう特別な機会でもなければこの先まず読み返すこともなからうと思ったからである。でも旅館のソファに座って、1人静かにトーマス・マンを読んでいると、なかなかじわっと心にしみるころがあった。現代という地点から読み返してみると「まあ、とくにたいした小説でもないよな」と思うのだけれど、それでもなおかつ。⁴⁾

このように、村上はエッセイで『トニオ・クレーゲル』については、否定と肯定の入り混じった評価をしているが、彼の『ノルウェイの森』は、マンの『魔の山』を下敷きにして書かれた作品である。

『魔の山』でも、『ノルウェイの森』でも、サナトリウム、療養所が重要な舞台となっている。また、どちらの作品にも、肉体のみならず精神を病んだ人物が登場する。このことは、『ノルウェイの森』においてより顕著で、ヒロインである直子のセリフでも端的に表現されている。下記に引用する。

「ねえ、どうしてあなた [主人公] そういう人たちばかり好きになるの?」と直子は言った。「私たちみんなどこかでねじまがって、よじれて、うまく泳げなくて、どんどん沈んでいく人間なのよ。私もキズキ君もレイコさんも。みんなそうよ。どうしてもっとまともな人を好きにならないの?」(上巻 289 頁)

ここからは、『ノルウェイの森』で、『魔の山』に言及される場面を取り上げる。

『ノルウェイの森』の主人公のワタナベトオルは読書家で、『魔の山』以外の本も読んでいるが、読んでいることが最も多く言及されるのが、『魔の山』である。

主人公に読ませることにより、『ノルウェイの森』が『魔の山』を参考にして書かれた作品であることが示唆されている。これは、小説や映画ではよく使われる手法である。⁵⁾ 全部で4か所あるが、最初に言及される場

面を下記に引用する。

彼女たちは同席の相手が僕だったことにちょっとほっとしたみたいだった。僕はきちんとした格好をしていたし、夕方に髭も剃っていたし、おまけにトーマス・マンの「魔の山」を一心不乱に読んでいた。(上巻 170-171 頁)

『魔の山』は、数字の7を1つのモチーフにしている作品だが、この点を『ノルウェイの森』は踏襲している。

ヒロインの直子は療養所に入院するが、主人公が直子の見舞いに療養所に行った時点で、直子と同室のレイコは療養所に既に「7」年いた(上巻 236-237 頁)。レイコが以前に別の療養所に入っていた期間は「7」カ月である(上巻 244 頁)。

直子とレイコの住んでいる棟は「C-7」(上巻 210 頁)、直子から主人公に送られてきた手紙は「7」枚の便箋(上巻 185 頁)、直子の着ているガウンのボタンは「7」個である(上巻 269 頁)。

また、『魔の山』の主人公のハンス・カストルプはエンジニアだが、レイコの夫は「航空機を作る会社につとめるエンジニア」である(上巻 244 頁)。

「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」(上巻 54 頁)という太字で記された死についての認識は、『ノルウェイの森』で重要な役割を果たしているが、『魔の山』の「死に対して健康で高尚で、そのうえ—これはとくに申し添えたいことですが—宗教的でもある唯一の見方とは、死を生的一部分、その付属物、その神聖な条件と考えたり感じたりすることなのです」(304)というセテムブリーニという登場人物のセリフを参考にしていると考えられる。

『魔の山』も『ノルウェイの森』も、物語はドイツのハンブルクから始まる。⁶⁾

療養所で直子と同室のレイコは、様々な点で主人公を教え導く人物で、『魔の山』のセテムブリーニを思い起こさせるが、どちらの作品でも主人公は、「最終場面の1つ手前の場面」で、彼らと「駅で」別れる。

作品がハンブルクで始まるという点が踏襲されていることから、『ノルウェイの森』の最終盤のこの別れの場面も、『魔の山』の意識的な反復と

考えられる。

3. 宮崎駿『風立ちぬ』における『魔の山』

近年の映画作品である、宮崎駿の映画『風立ちぬ』(2013年)でも『魔の山』への言及がある。

登場人物の会話の中に『魔の山』という作品名があらわれ、「カストルプ」(『魔の山』の主人公の名前)と名乗る登場人物も現れる。また、ヒロインの菜穂子は、『魔の山』のサナトリウムのような療養所に入る。

療養所の描写に関して『魔の山』の関連資料を参考にしたことについては、宮崎は半藤一利との対談で明かしている。

半藤：映画 [『風立ちぬ』] で特に印象的だったのは、療養所に入った菜穂子が、雪が舞う中、ベランダで毛布にくるまって寝ているシーン。当時は、ストレプトマイシンなどの特効薬がなかったから、空気の良いところで滋養を取って安静にしているよりほかに方法がなかったんですね。

宮崎：トーマス・マンの『魔の山』の関連資料を見ていたら、氷柱が落ちるようなところで毛布をかぶって患者がコーヒーを飲んでいる写真があったんです。それを使ってみようかと。⁷⁾

そして、『風立ちぬ』の主人公の堀越二郎が、避暑地のホテルで休暇を取っている場面で、『魔の山』への言及がある。カストルプと名乗る登場人物と言葉を交わす場面である。⁸⁾

カストルプ「いい夜です。ここは Der Zauberberg」

堀越二郎「魔の山。トーマス・マン」

カストルプ「忘れるのいい所です。チャイナと戦争してる。忘れる。満州国作った。忘れる。国際連盟抜けた。忘れる。世界を敵にする。忘れる。日本破裂する。ドイツも破裂する」⁹⁾

避暑地のホテルは、不穏な世界情勢からは隔離された別世界で、その意味で『魔の山』のサナトリウムに通じる空間である。

4. 石川慶『Arc アーク』における『魔の山』

石川慶の『Arc アーク』（2021年）は、不老不死をテーマとした日本のSF映画で、この作品にも『魔の山』の影響が見られる。アメリカの作家ケン・リュウによる原作小説は短編で、¹⁰⁾ 映画には原作にない要素がかなり加えられている。

『ノルウェイの森』、『風立ちぬ』では、作中に『魔の山』というタイトルが出てくるが、『Arc アーク』には『魔の山』というタイトルは出てこない。

しかし、様々な点で主人公を教え導くエマという登場人物が主人公のリナに対して発する、「生きることの対極が死ではないの。生きることの中に死があるの」¹¹⁾ というセリフから、この映画は『魔の山』を参照していると考えられる。エマは、『魔の山』のセテムブリーニ、『ノルウェイの森』のレイコに相当する登場人物と言える。

原作は日本ではなくアメリカが舞台で、ドイツ的な要素は全くないが、映画にはそうした要素が加えられている。

石川は、原作にはないドイツ的な要素（利仁（Licht）という名前の登場人物、不老不死についてドイツのマックス・プランク研究所で研究したという設定）を盛り込むことで、『魔の山』を参照していることを示唆しようとしたのかもしれない。

5. まとめ

『ノルウェイの森』は、主人公が作品全体を通して取り組む「生と死をめぐる思索」に『魔の山』の影響が見られるだけでなく、作品の冒頭と終盤という構成面でも『魔の山』を反復している。

『風立ちぬ』も、サナトリウムのような世間から隔離された小世界、「生、病氣、死」が重要な要素になっている点で、『魔の山』に通じる。

『Arc アーク』は不老不死をテーマにした作品であるが、生と死をめぐる思索に『魔の山』における「死は生の一部」という思想が組み込まれている。不老不死の処置を行った主人公のリナが最終的に不老不死を放棄するということからしても、『魔の山』の要素がこの作品で果たしている役割は小さなものではない。

『魔の山』は現代日本の作家や映画監督に参照され、サナトリウムのような世間から隔離された小世界、「生、病氣、死」というテーマ、「死は生

の一部」という思想などの『魔の山』の要素が、彼らの作品の中にも組み込まれている。

『魔の山』の前置きでは、この作品が物語であることが強調されているが(9-10),『魔の山』を下敷きとした新たな物語が、現代でも紡がれ続けているのである。

註

- 1) テキストは、Thomas Mann: Der Zauberberg. In: ders.: Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Frankfurt/M. (Fischer) 2002. Bd.5.1.を用い、『魔の山』からの引用は、ページ数のみ記す。邦訳に際しては、『トーマス・マン全集(全12巻+別巻1)』、高橋義孝ほか責任編集、新潮社、1971-1972年。を参照した。村上春樹『ノルウェイの森』からの引用は、講談社文庫(2004年)を用い、上下巻の別と頁数のみ記す。引用文における下線と[]による補足はすべて引用者による。引用文の傍点部は、ドイツ語原文ではイタリック体による強調である。
- 2) 洲崎恵三:『トーマス・マンー神話とイロニーー』、溪水社、2002年。15-19頁(序論第3節「日本におけるトーマス・マン受容ー自然とフマニスムス」)、小黒康正:近代日本文学のねじれー三島由紀夫、辻邦生、村上春樹におけるトーマス・マン、『文学研究』第102号、九州大学大学院人文科学研究院、2005年。を参照。例えば、北杜夫の『楡家の人びと』(1964年)は『ブッデンブローック家の人々』(Buddenbrooks, 1901)、三島由紀夫の『禁色』(1951-1953年)は『ヴェニスに死す』(Der Tod in Venedig, 1912)の影響が見られる作品である。
- 3) 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985年)も、カフカの『掟の門』(1915)の影響が部分的に見られる作品である。村上は、2006年にはフランツ・カフカ賞を受賞している。
- 4) 村上春樹:『うずまき猫のみつけかた』、新潮文庫、1999年、83頁。
- 5) 例えば、田山花袋の『蒲団』(1907年)は、花袋自身が認めるように、小説の中にも登場するドイツ自然主義の作家ゲルハルト・ハウプトマン『寂しき人々』(1891年)をお手本あるいは下敷きにしていた。栗原裕一郎:『盗作の文学史』、新曜社、2008年、39頁。
- 6) 『ノルウェイの森』がハンプルクから始まることが『魔の山』の冒頭部の反

復であることは、下記の論文でも指摘されている。山崎眞紀子：直子の乾いた声－村上春樹『ノルウェイの森』論、『めくらやなぎと眠る女』とともに。『札幌大学総合論叢』第29号、2010年、237頁。『魔の山』と『ノルウェイの森』の冒頭部は、下記の通りである。

『魔の山』

ひとりの単純な青年が、夏の盛りに、故郷ハンブルクを発って、グラウビュンデン州ダヴォス・プラッツへ向かった。3週間の予定で人を訪ねようというのである。(11)

『ノルウェイの森』

僕は37歳で、そのときボーイング747のシートに座っていた。その巨大な飛行機はぶ厚い雨雲をくぐり抜けて降下し、ハンブルク空港に着陸しようとしているところだった。11月の冷ややかな雨が大地を暗く染め、雨合羽を着た整備工たちや、のっぺりとした空港ビルの上に立った旗や、BMWの広告板やそんな何もかもをフランドル派の陰うつな絵の背景のように見せていた。やれやれ、またドイツか、と僕は思った。(上巻7頁)

- 7) 宮崎駿・半藤一利：記念対談『風立ちぬ』戦争と日本人、『文藝春秋』2013年8月号、103頁。
- 8) カストルプは、主人公とヒロインの恋の手助けのようなこともするので、ストーリー上もそれなりに重要な登場人物である。
- 9) 『風立ちぬ』、宮崎駿監督、DVD（ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン、2014年）、1時間15分44秒-16分11秒。カストルプは別の場面のセリフでも、「ここは魔の山。みんな治る」と『魔の山』に言及する（1時間23分17秒-23分21秒）。
- 10) Ken Liu: Arc, The Magazine of Fantasy & Science Fiction, September/October issue, Spilogale, 2012. 邦訳は、ケン・リュウ：『Arc アーク』、早川書房、2021年、など。
- 11) 『Arc アーク』、石川慶監督、DVD（バンダイナムコアーツ、2022年）、42分48秒-43分2秒。

